流産に悩んでいませんか？

妊娠はするのに、2回以上の流産、死産を繰り返してしまうことを「不育症」と呼びます。次に妊娠したときに、また同じことが起こるのではないかと心配になるかもしれません。

不育症の相談窓口があります

不育症の相談窓口が全国に設置されています。
「不育症相談窓口」で検索、または、下記のQRコードより、アクセスし、最寄りの相談窓口にご相談ください。

お気軽にご連絡ください

専門医に相談するまでの簡単ステップ

「不育症相談窓口」で検索、
または、下記のQRコードよりアクセスしてください

不育症相談窓口は、全国都道府県に73箇所設置
（2019年7月現在）

お気軽にご連絡ください

不育症のお悩みは最寄りの相談窓口で

不育症は治療が可能です
お悩みの方は専門医のアドバイスを受けてください

ひと、くらし、みらいのために
厚生労働省
Ministry of Health,Labour and Welfare

不育症についてのQ&A

不育症についての正しい知識の普及と、不育症で悩む方の不安を解消するために不育症に関するよくある疑問におこたえします。

Q. 不育症とは何ですか？

A. 妊娠をするものの、流産や死産、早期新生児死亡などを繰り返すことを、不育症と呼んでいます。

Q. 流産はどれくらいの頻度でおきますか？

A. 女性の年齢にもよりますが、一般的に超音波検査で確認できた妊娠のうち、15%程度が流産になると言われています。

Q. 流産が起こるのはいつごろが多いのですか？

A. 妊娠12週未満の早期流産が大部分（全流産の80%以上）を占めます。妊娠12週以降22週未満の後期流産の頻度は少ないとされています。

Q. 不育症の原因は何ですか？

妊娠初期の流産の大部分は胎児（受精卵）の偶発的な染色体異常が原因であり、両親のリスク因子が原因である場合は少ない

A. 妊娠初期の流産の大部分は胎児（受精卵）の偶発的な染色体異常が原因であり、両親のリスク因子が原因である場合は少ないとされています。両親の染色体異常に加えて、女性側のリスク因子としては、子宮形態異常や、血栓症のリスクが高まる抗リン脂質抗体症候群など、様々なものがあります。なお、詳しく調べてもリスク因子がわからない場合が65%ほどあるとされています。

Q. どのような場合に検査が必要ですか？

A. 2回以上流産を繰り返す場合は、両親のどちらかにリスク因子がある可能性が高いので、検査をお勧めします。ただし、1回の流産でも妊娠10週以降の場合では、母体のリスク因子が原因である可能性が大きいとされていますので、検査をお勧めします。

Q. 不育症でも妊娠、出産はできますか？

A. データでは、不育症とされた方も、約75%が出産されています。不育症は、治療の必要のない胎児染色体異常が原因の多くを占めますが、子宮形態異常や、血栓症のリスクが高まる抗リン脂質抗体症候群などの場合は、治療が必要になることがあります。

Q. 女性の年齢は流産と関係しますか？

A. 妊娠時の女性の年齢が高齢になると、流産の割合が増加するとされています。母体年齢35-39歳で25%、40歳以上で51%が流産しているという海外の報告があります。

Q. 不育症について相談するにはどうしたらよいですか？

A. 流産を2回以上繰り返す場合、相談をお勧めします。主治医の産婦人科医師、または全国の不育症相談窓口にお気軽にご相談下さい。